

国際青年

2018年(平成30年)5月1日発行

第46号

埼玉国際青年を育てる会・会報

Saitama Association for International Youth Volunteers

国際協力出前講座

国際貢献ってどんなことなの？

—協力隊で活躍した方から聞いてみよう—

青年海外協力隊やシニア海外ボランティアとして海外で活動してきた隊員を講師に招いて、派遣された国での体験を語ってもらおうという要請が増えてきました。当会では活動の一つとして、小・中学校、公民館などの出前講座を活発にコーディネートしています。平成29年度に行われた出前講座を紹介いたします。

■平成30年1月18日(木)

川越市立砂中学校

川越市立砂中学校は、地域の人口急増に伴い、昭和56年4月に高階中、城南中、東中の3校から分離され、1、2年生のみの8学級で開校しました。校内には、開校10周年の事業として「花時計」が設置され、現在学校のシンボルとなっています。また、ノーチャイムで教育活動が展開された市内最初の中学校ということで、これらを教育活動の中核と位置づけ、「花と緑とノーチャイム」が伝統として受け継がれています。全校生徒数は、男子280名 女子243名 合計523名です。

今回の出前講座は昨年引き続き2回目の訪問となります。3年生の進路学習の進路決定に向けて「外国の人々の為に貢献してきた青年海外協力隊員の生き方を学び、私たちの生活や進路に生かそう」をテーマに、本会から依頼した5名の講師が各学級(5学級)に一人ずつ入り授業を行いました。

- ・出前講座……………1～4
- ・平成29(2017)年度社行会……………5
- ・現地レポート……………6～10
- 46号目次 ●
- ・新入会員ご紹介……………10
- ・小さなハートプロジェクト……………10
- ・家族連絡会……………11
- ・会員出版本紹介……………11
- ・ホームページ活用のお願ひ……………12
- ・事務局便り……………12

●講師：藤木有美さん…1組

(平成20年度2次隊 モンゴル JV 理科教師)



青年海外協力隊参加の動機については、高校時代に9.11事件が発生した際、英語の先生の言葉により国際協力に関心を持ち、自分にはできることは何かを考えるようになってからだそうです。そして大学で農林業・途上国支援を学び、タイやインドネシアにも行ってみましたが、課題を感じてもっと現場に行つて自分の五感で理解してみたい気持ちが強くなって応募したそうです。生徒たちに、自分の目と耳で知ること、手を動かすこと、周りの人を大切に、今の一步一步を大切にしてくださいと訴えていました。

●講師：北林真弓さん…2組

(平成26年度1次隊 エチオピア JV 小学校教育)



はじめに青年海外協力隊のことについて説明され、赴任先のエチオピアの状況や現地の小学校での活動について映像をもとに詳しく紹介しました。そして、この国の人たちは祖先や目上の人へ敬意

を表すことを重んじ、個人よりも集団での行動や協調性を大切にするというように、日本の文化とのつながりを感じる国だと話されていました。2年間の活動を振り返って、一生大切にしたいもの(人・もの・考え方…等)をたくさん得ることができたと笑顔で話されていました。

●講師：田中翔泰さん…3組

(平成27年度2次隊 ガーナ JV PCインストラクター)



青年海外協力隊紹介ビデオや現地での様子を撮影した動画を流すと、生徒たちは静かに微笑みながら鑑賞していました。協力隊に参加したきっかけは、企業で数字を求めただけで有限な人生を消耗したくない、何か自分ができることでよいことをしたいという思いからだそうです。そしてその経験から、多様性を理解できるようになったそうです。帰国後現在は、開発途上国から世界に通用するブランドをつくる(開発途上国の人々が自立する仕事・ものづくり)会社で働いていると紹介していました。最後に、「視野を広げてやりたいことみつけよう」と訴えていました。

●講師：新(あたらし)江梨佳さん…4組

(平成23年度1次隊 マラウイ JV 理数科教師)



青年海外協力隊に参加するまでの自分の足跡を紹介し、その時々考えたことや様子を丁寧に話したことによって生徒たちの心をつかみとりました。生徒たちもうなずきながら共感を持って聞くことができました。また、アフリカのマラウイというなじみのない国の紹介では、写真を提示しな

がらイメージを持たせ考えさせていました。派遣された場所が豊かでなく便利でなくてもそこで生き生きと生活している人々の関わりを通して、たくさん得ることができましたという明るい声が爽やかに聞こえました。

●講師：横田明菜さん…5組

(平成21年度3次隊 メキシコ JV 環境教育)



青年海外協力隊について、そして派遣されたメキシコについてスペイン語を交えながら学習がスタートしました。ミミズコンポストの利用やごみ分別の取り組み等、環境教育活動を通して現地の人とのかかわりを説明されました。これらの活動を通して横田さんは、多様性を理解できるようになったことや視野が広がったということを説明されていました。

現在、大学院に通いながら県内で起業している横田さんは、「ビジネスとは自分が創りたい世界を創ることです」と生徒たちに夢のある言葉を投げかけてくれました。

今回訪問した砂中学校の担当者から次のような報告をいただきましたので紹介いたします。

5人の講師をお迎えし、青年海外協力隊について、またその活動への動機、派遣国について、活動内容について話を聞き、次のようなことを知る良い機会となりました。『●今、自分たちのいる現状が豊かであること ●文化、風習、行動等の多様なものを異質ととらえるのではなく、その国々の面白いものとして受け入れることによって互いを理解できるようになること ●現状に甘えることなく夢をあきらめず努力すれば達成できること ●感謝の気持ちと身近な人とのつながりを大切にすることによって、未来が開けること ●周囲に目を向け、ほんの小さな活動が国際貢献の一步になること』実際に海外で活躍した人の話を聞くチャンスはなかなか持てません。映像より生の声は、より生徒たちに訴えるものが大きいようです。5人の講師の皆様、貴重なお話ありがとうございました。(黒須琢也)

■平成30年2月23日(金)

朝霞市立朝霞第六小学校

朝霞市立朝霞第六小学校は、昭和42年4月、学区変更により川越高等学校朝霞分校(定時制)の校舎跡を利用して創立され、今年52年目を迎えます。目指す学校像「学ぶ喜びと感動のある学校」のもと、「花あり 歌あり 笑顔あり」を合言葉に教育活動が展開されているようで、当日も6年生131人のたくさんの笑顔に出会うことができました。

●講師：木村みのりさん

(平成23年度2次隊 フィリピン JV ソーシャルワーカー)



「青年海外協力隊を知っている人いますか」の質問から授業が始まりました。

「開発途上国に行って何かをお手伝いするとともに、日本のことを知ってもらえるように一生懸命頑張ってきました」と小学生にも分かるように、やさしく話しかけ、フィリピンの様子について、現地で取り組んだ仕事について、映像を使いながら丁寧に説明してくれました。小学生にとってソーシャルワーカーというなじみのない職業を、「相談を受ける人」という言葉で説明し、15人位の子どもたちと施設で共同生活をしながら課題を見つけ、それに向かって取り組む子供たちとかかわりながら、課題解決に取り組んだ様子を細かく話してくれました。

そしてこれらの活動を通して、「何事もまずはやってみること。それが自分のためでもいい。応援してくれる人は必ずいる。無理をしてはいけないけれど楽しんでもいけない姿勢が大切ではないかと感じました」と子どもたちに訴えかけました。

最後にまとめとして、青年海外協力隊として与えられた時間は有効に使わなければならないし、言葉の通じない苦労もありましたが、たくさんの人々と関わることでとても充実した時間を過ごすことができましたと、笑顔で話されていました。

●講師：広瀬勝弘さん

(平成25年度1次隊 ヨルダン JV 環境教育)



青年海外協力隊について、開発途上国について、ヨルダンについて等、クイズや冗談を交えたお話で、子どもたちの心を引き寄せる広瀬さんの話術には感心させられるばかりでした。特にヨルダンについては、自然・食事・言語・文化・生活等について豊富な映像で丁寧に楽しく説明してくれました。

そんなヨルダンで活動した環境教育については、特に「ごみの処理について」を考えさせることから出発したそうです。ゴミはゴミ箱への考え方の薄いヨルダンの人たちに体で教える活動として、体験活動やイベントを通して、ごみのポイ捨てはいけないこと、ゴミの分別がだいじなこと、ゴミ拾いは環境美化になることを訴えてきたそうです。

また、2年間のヨルダンの生活について、驚いたことをいくつか事例をあげ説明されました。生活習慣は国が変われば違うのは当たり前のことということをも、「●おどろき(なに、これ?) ●はっけん(へー、日本と違うね) ●きょうみ(これおもしろいね!)」という視点で受け入れることが大切だということ。それは、外国の生活文化の違いを単に「変なの。気持ち悪い」で終わらせるのではなく、このような姿勢で受け入れることが大切だという国際理解教育の視点が盛り込まれているものでした。とても説得力のあるお話でした。

6年生4クラスを2つのグループに分け、それぞれ2回ずつ、2人の講師の方にお話をさせていただきました。講演内容は、「青年海外協力隊員として勤務した経験から学んだこと」でした。子どもたちも2人の講師の話を、メモを取りながら真剣に聞いてくれました。映像を使用したお話は、派遣先の食文化や町の様子などイメージしやすく子どもたちには驚きがたくさんあったようです。担当された6年生の先生方からも、「子どもたちは直接お話を聞くことにより刺激となり学びが前向きになりました」とお礼の言葉をいただきました。出前講座担当者としてやりがいを感じた瞬間でした。(黒須琢也)

■平成30年3月1日(木)

戸田市立戸田第二小学校

戸田市立戸田第二小学校は、本会の出前講座をここ数年利用してくれる常連校で担当者も慣れ親しんでいる学校です。訪問したのが3月ということもあって、当日は6年生を送る会や学年末授業参観日ということで、卒業・進級を前にした凛とした雰囲気の内と喜びあふれる子どもたちの顔に触れることができました。小高校長先生に学校の花「黄色い菖蒲」の由来をお聞きし、地域の隠れた財産が脈々と受け継がれていることに感銘いたしました。

●講師：藤木有美さん

(平成20年度2次隊 モンゴル JV 理科教師)



モンゴルの青い民族衣装で子どもたちの前に登場した藤木さんは、モンゴルのウランバートルの小学校へ理科の教師として派遣されました。

はじめに、青年海外協力隊や協力隊参加の動機についてお話されました。その後、モンゴルでの生活(衣食住)や現地の小学校の様子をたくさんの映像を使いながら紹介し、日本との違いやその国の生活ぶりを6年生の子どもたちにわかりやすく楽しく説明してくれました。そして、2年間の生活の中で「楽しかったこと・うれしかったこと」「悩んだこと・大変だったこと」「学んだこと」等について、自分の思いを話してくれました。その中で藤木さんから子どもたちへ「今の一步一步を大切に」という言葉かけがありました。何事も自分の目と耳で知ること、手を動かすこと、周りの人を大切にすること。「国際協力とは自分の周りの人を大切にする(きにかけてあげる)ことなのです。みなさんも今自分のいる環境から学んでくださいね」という言葉は、小学校卒業を間近に控えた6年生にぴったりの言葉でした。

●講師：横田明菜さん

(平成21年度3次隊 メキシコ JV 環境教育)

「オラー」(こんにちは)というメキシコのあいさつで元気に授業が始まりました。

はじめに青年海外協力隊のことや派遣が決まっていたことについて詳しくお話がありました。また、スペイン語でのじゃんけんやお給料についてなども話してくれました。横田さんが青年海外協力隊に参加したきっかけは、テレビ番組の「世界ふしぎ発見」だったというお話は、子どもたちから親近感を得たようでした。

メキシコでの生活については、横田さんが活動した環境教育の視点から、説明がありました。生ごみをミミズで減らすという話に子どもたちはイ



メージがつかめないようでしたが、ミミズコンポストで生ごみを肥料に変えるためにミミズをたくさん飼育していると、具体的に映像をもとに話されると、子どもたちには驚きの表情が見られました。子どもたちにとってはごみとミミズと肥料が結びつかなかったようでしたが、しっかりと学習できたようです。また、現地の学校巡回や高校生との環境プロジェクト、ごみの分別についての啓発活動、女性の生活環境調査等、積極的にメキシコで取り組んだ環境教育についての紹介がありました。

最後に横田さんは、青年海外協力隊員として外国の人達と関わって、「文化の多様性を知り、体験し、現地の人と語ることで好奇心の感情が薄れ視野が広がった」「視野を広く持ちながら、行動は身近なことに目を向けるという考え方になった」と感想を話されていました。

6年生4クラスを2つのグループに分け、それぞれ2回ずつ、2人の講師の方にお話をいただきました。社会科の授業の「国際貢献ってどんなことなの 青年海外協力隊で活躍した人から聞いてみよう」という学習が終了していたので、子どもたちからもたくさんの質問がありました。その中の二人の子どもの感想を記して報告といたします。

「生活習慣や文化の違いを学ぶことができました。私も困っている人がいたら助け、これからも友だちを大切にしながら関わっていきたいです」「お話を聞いて、教科書だけではわからない細かいことまで学べました」(黒須琢也)

★平成29(2017)年度壮行会

■3次隊壮行会

平成29年12月20日(水)

埼玉県知事公館

埼玉国際青年を育てる会・青年海外協力隊

埼玉県OB会の共催



師走の半ば、好天に恵まれたこの日、埼玉県主催の親善大使委任式に引き続き、今回も知事公館2階中会議室において壮行会を開催しました。派遣隊員が、スーツに身を固め、緊張の面持ちで居並ぶ中、本会の榎本敬常任理事（青年海外協力隊埼玉県OB会長）による司会の下、壮行会の幕が開かれました。本会星野和央会長による現地での大活躍と健康を祈念しての激励の挨拶に引き続き、埼玉県民生活部国際課津久井健介主査、JICA 東京国際センター木野本浩之所長、(一社)協力隊を育てる会奥永眞智子常任理事から、それぞれのお立場からの心温まる挨拶をいただきました。次に、暖かな日差しが降り注ぐ窓際に一列に並んだ隊員から一人一人派遣後の抱負が語られました。今回の派遣は、青年海外協力隊12名、シニアボランティア4名、日系社会人青年ボランティア1名、計17名（欠席1名）ですが、いつもも増して力強い決意が語られ、頼もしく感じられました。

さて、ここからがリラックスタイムです。本会瀬島孟副会長の乾杯の発声の後、本会の目的の一つでもありますOBとの情報交換を兼ねた懇談会がにぎやかな雰囲気の下で始まりました。多くの隊員が具体的な助言を、笑顔で受けているようでしたが、中にはやや心配そうな顔も見られました。今回の派遣者の経歴は多岐に亘り、中には4回目の派遣となるシニアボランティアや配偶者がすでに任地で活躍しているという方もおられました。会の結びには、恒例となった隊員OBからの激励の言葉があり、今回は、9名の方から熱のこもった愛情あふれる助言をいただきました。充実した壮行会は、隊員代表の力強い決意のこぼれをもつて閉会となりました。(小島章裕)

■4次隊壮行会

平成30年3月23日(金)

埼玉県知事公館

埼玉国際青年を育てる会・青年海外協力隊

埼玉県OB会の共催



桜の花がほころびはじめたこの日、青年海外協力隊6名シニア海外ボランティア3名の壮行会が行われました。

育てる会星野和央会長の主催者挨拶に始まり、埼玉県民生活部国際課津久井健介主査とJICA 埼玉デスク廣瀬勝弘国際協力推進員、(一社)協力隊を育てる会藤澤礼香さんから挨拶がありました。

隊員からの自己紹介の後、埼玉県2017年度帰国表敬訪問を終えた8名からアドバイスがあり、協力隊OB会5名からも「楽しんで!」「現地レポートを書くことが大事」「2年はあつという間」などの激励のこぼれがありました。

「元気にやってきます!頑張ります!」との隊員代表のあいさつでお開きになりましたが、隊員はいつまでも話が尽きないようでした。



隊員の派遣先と職種は

ザンビア：小学校教育、経営管理 パプアニューギニア：小学校教育 タンザニア：野菜栽培
ガーナ：コミュニティ開発 ネパール：害虫駆除
パラグアイ：看護師 ジャマイカ：小学校教育
ミャンマー：青少年活動

(海沼志織)

現地レポート

■岩井隆志（三郷市）

2017年度1次隊 ヨルダン JV 環境教育

赴任2ヶ月で思うこと

2017年の8月末任地のペトラへ赴任してはや2ヶ月、あっという間に10月に入り、朝に雲が出ていることが多くなりました。(8月～9月くらいまでは雲を見たことがなく、常に晴天!!でした)同時に風も強くなり、私も含め風邪を引いた人がちらほら。



日本の優しく包むような日差しに慣れた私には、ヨルダンの刺すようなそれは本当にキツく、毎日職場から帰ると日が傾くまで家の中で過ごし、夕方になると食材の買い出しをしていました。その帰り道、ペトラの向こうに沈んでいく夕陽を眺めに自宅近くの見晴らしが良い丘に寄り、そこから見下ろすペトラと、小さく点々と見える観光客。それをいつまでも眺めていると、いつの間にか星が出ていることに気づき、家に帰っていました。



そんな風に過ごした夏はいつの間にか過ぎ、高原にいるような気持ちのいい秋になりました。近頃は上着を着ている人たちも見かけます。学校に通う子供達は9月と服装は変わっていませんが、秋は短く、冬になると雪もたまに降るそうで、今からその景色が楽しみでもあり、「防寒対策はイメージになかったなあ」と考えている日々です。

そんな中、日本では良くないニュースばかりが



流れる中東において、世界遺産がある土地柄、観光立国のヨルダンには欧米諸国だけでなく中南米などからも観光客が訪れています。

首都に上るためにバスに乗る時などに同じバスには色々な国の人が乗っています。その中には日本人が乗っていたりすることもあります。

日常ではアラビア語か英語しか耳にする機会はないため、車内で聞く日本語はなんだか懐かしく、思わず喋りかけたい気になります。

ちなみに、こちらの人たちは日本が大好きで、日本人と分かると、ヤーバーン・クワイエス(日本はとっても良い)と言ってくれます。主にテクノロジーと車のイメージからきているようで、「日本製品は壊れない」らしいです。

そんなペトラでまだまだ思うようにいかないことだらけですが、焦らずしかし限られた時間を意識しながら活動していきたいと思います。

(2017/10/12)

■島田明夫（春日部市）

27年度3次隊 チリ SV 日本語教育

青年海外協力隊チリ派遣20周年式典でよさこい踊りを披露



2017年12月1日に平石駐チリ大使をはじめ関係者の列席を賜りJICA 青年海外協力隊チリ派遣20周年式典が開かれました。写真は式典終了後のサプライズ演出として隊員が踊った「正調よさこい鳴子踊り」の様子です。

式典の2日前に年1度の隊員中間報告会があり

11人全ての隊員が1年ぶりに一堂に会した機会に、新年早々帰国する私の送別会をスペインレストランで開いてくれました。この時、20周年式典で日本文化紹介を兼ねて隊員全員で「よさこい踊り」をやれないだろうかと思ひ、鳴子を持って「正調よさこい鳴子踊り」を披露したところ、周りのお客様が期せずして大きな拍手をいただきました。そこで、式典終了後にいっしょに踊らないかと隊員に提案したところみんながやる気になってくれました。

翌日、私はチリ中央日本人会から現地で作ってもらっていた鳴子を持ってJICA事務所に行き、隊員全員に1時間ぐらいよさこい踊りの指導をした結果、私の踊りを見ながらなんとなく踊ることができるようになりました。



当初、式典時のジャケットだけ脱いで踊ればいいという軽い話だったのですが、せめて鉢巻と法被で踊った方がいいという声が上がリ、鉢巻は剣道の指導で来ている金子隊員が準備し、法被は私がチリ日本人会から借りることにしました。「正調よさこい鳴子踊り」のCDをかけるラジカセがありませんでしたが、ICAチリの桜井支所長が持って来てくれることになり何とか準備が整い当日を迎えることができました。当日はチリ在住JICA隊員11名と安全教育で来られていたJICA本部の井上さん等15名で「正調よさこい鳴子踊り」を披露し参加者から大きな拍手を頂きこの式典に花を添えることができました。これを機にJICA隊員により各地でもよさこいの種が蒔かれることを期待しています。

(2017/12/26)



■浪間美奈希(所沢市)

28年度1次隊 モロッコ JV 青少年活動

モロッコに来て思うこと

早いもので、任期残り半年となりました。モロッコでの生活は日本のように時間に追われるということはないものの、言葉の不自由や文化の違い、村では手に入らないものがあることや交通の便の悪さなど、何をやるにも時間がかかり、毎日毎日が飛ぶように過ぎていきます。モロッコはアフリカ大陸の中では環境的に恵まれている国であると言われてます。実際に暮らしてみると、都市に出れば大概のものは手に入るの、何かがなくて本当に困ったという経験はありません。が、任地の村では手に入らないものは山ほどあります。例えば「シャンプーは売っているけどコンディショナーはない」などです。

私の任地は首都ラバトから南西約250キロにあるシディスマイル(Sidi Smail)という村で、周囲の町や村に比べて発展が遅く、アスファルトが国道1本のみという、砂で覆われた、しかも強風の村です。村のいいところは、みんな素朴であり、またすぐ砂まみれになるためか洒落た恰好をしている村人は若者ですらおらず、極端な話寝間着で外を歩いて誰も気にしないところ。また小さな村なので、なにか変化を感じるとすぐウワサになります。例えば、「見ない顔(よそ者)が村に入っている」など。そうやって村が守られています。



この村に来て中学生に裁縫を教えるようになり、その活動を通していろいろなことを感じています。イスの座り方、まっすぐ立つということ、字を書くときは利き手でないほうの手で紙を押さえるということ、手を清潔に保つということ…etc. よく考えると、普段私たちが何気なく行っている行為は幼少の頃にしっかりと教えられたものであり、けっして自然に身についたものではありません。日本の教育は本当にすごいと感謝をし、「勉強」と

いう意味だけではない教育の大切さを強く実感しています。

そして子供たちの吸収力の高いこと！私の村ではアラビア語の方言であるダリジャという言葉を使う為、国の第二言語であるフランス語会話を村で耳にすることはありません。しかし子供たちは小学校からフランス語を習っているため、私は取ってフランス語を使用して活動をしているのですが、フランス語初心者の方と授業でフランス語を習っているだけの中学1～2年生のレベルでは共通言語にはなりません。でも、ちゃんと伝わるのです。やはり人間同士だな、と思います。



ハサミの渡し方を教えたあと、縫い針も同じように自分が針先をもって私に渡してきたときには本当に“すごい！”と思いました。できないのではなく、教えられていないだけなのです。そんな子どもたちと私の合言葉は、「レベテ、レベテ、レベテ、ピヤン、ピヤン、ピヤン」。フランス語としては正しくありませんが、「繰り返して、繰り返して、繰り返して、だんだん上手になる」という意味で使っています。

子どもたちはその言葉だけは理解をしているようなので、裁縫だけでなくフランス語でもなんでも、なにか好きなことを見つけて、今は出来なくても続ければ力になるということをつか実感してもらえたらな、と思っています。(2018/2/12)

■橋本温美(草加市)

28年度2次隊 フィリピン JV 看護師

レイテ島の懸け橋

レイテ島はフィリピン中央東に位置する島である。レイテ島といえば戦争やスーパー台風ヨランダを思い浮かべる人が多いと思うが、今回はもう一つレイテ島をイメージづける巨大な橋、レイテ島北端タクロバン市とサマル島をつなぐ唯一の陸路であるサンファニーコブリッジを紹介したい。

サンファニーコブリッジは、1969年に日本の援助でマルコス政権のインフラ政策の下建設が開始され、1972年に完成した。総額約22億円が建設費用としてつぎこまれ、当時は「戦後最大の税金無駄遣い」などと酷評されたが、2013年11月、巨大台風ヨランダがレイテ島を襲った時に、支援助物質を運ぶ車や避難する人々の車で橋の上が埋め尽くされても破壊されなかったことから、「さすが日本の技術だ」と人々に賞賛された。



この橋は、フィリピンで一番長い橋であり、橋の全長は2.1kmに及ぶ。高さは海面から41m、中型のボートがゆったりと下を通りぬけることが出来る。橋全長のデザインとして、サマル島側半分は緩やかな曲線でサマルの頭文字「S」を描き、レイテ島側半分はレイテの頭文字「L」を描くよう設計された。赤く塗られた橋のフレーム部分は太陽に照らされると鮮やかに映え、夜間はソーラー発電による電力で照らされたライトが等間隔に並んで光る。タクロバン市では今後、LEDを取り付けて、日本のレインボーブリッジのように夜間のライトアップを楽しんでもらうように計画をしている。

先日友人と共にこの橋を歩いてみた。片道約30分。橋の両入り口では銃を所持した警察官が検問をしているが、日本人が来たとき分ると友好的に話かけてくれた。写真撮影やウォーキングを楽しんでいる人も沢山いて、穏やかな時間が過ぎていくのを感じた。私が歩いた時刻は夕日が沈む前の午後4時頃であり、風は心地よく肌に触れ、海の音は静かに耳に届き、橋の下にある小島では木々の葉が揺れていた。また橋付近の海面では、小型の木造船で釣りをする地元住人や、浅瀬で泳ぐ子供達の様子が見受けられた。

タクロバン空港から橋までは車で約30分。レイテ島へ来られた際はぜひ、日本とフィリピンの友好の懸け橋であるサンファニーコブリッジに立ち寄っていただきたい。

(2018/2/20)

■舟橋拓矢（熊谷市）

2017年度2次隊 ベルー JV 環境教育

ピウラ通信

今年の日本の冬は記録的な大寒波が到来していたようですが、ペルーは逆に夏です。任地のピウラは常に夏なのですが年明けからは特に暑くなっています。レポートを通して皆さんに少しでも任地の紹介をしていければと思います。



私が活動しているピウラは、ペルー北西部のコスタに位置しピウラ州の州都でもあります。首都リマからは約980kmの位置にあり、飛行機で1時間半ほどかかります。日本でいうと東京から長崎に行くような距離です。約100km北上するとエクアドルとの国境になります。市内にはピウラ川の中流が流れていて、昨年はエルニーニョ現象の影響で洪水が発生して市内も冠水する大きな被害が出たそうです。現在、配属先が管轄する中心区域には約30万人が住んでいます。



気候は砂漠気候のため降水量は少なく赤道に近い間年を通して平均最高気温は30℃を超え

ます。蒸し暑い日本の夏と比べると乾燥しているので過ごしやすいですが、そうは言っても1月から3月は最高気温が日本の猛暑日並みに上がるため暑いです。

青年海外協力隊の任地では、電気や水道がないところで生活しているイメージがあるかもしれませんが、ここ数年ペルー経済が好調であるおかげもあってか市内には3つのショッピングモールもあります。停電や断水などは時々起こりますが、ここでは生活に必要な物は揃っています。

一方、人々の生活が豊かになってきていますが、急速な都市化や生活の変化で様々な社会問題も起き始めています。その内の1つがごみ問題で、今回環境教育ボランティアの要請があり赴任することになりました。本活動を通してピウラのごみ問題の解決に向けて少しでも役に立てるよう活動していきたいと思っています。（2018/3/9）

■井澤浩美（さいたま市）

2017年度1次隊 ポリビア SV 看護師

ポリビア便り

こちら、ポリビアはこれから秋～冬になります。ポリビア、タリハに来て9カ月経ち、言葉も少しずつ分かるようになってきました。



隊員も、来た時は私1人でしたが、今はジュニアが2人増え、3人になりました。隊員が近くにいるだけで心強くなるのを実感しています。

活動はなかなか困難さを感じていますが、何とかやっています。





2月に南米3大祭りのひとつ、オルコのカーニバルに行ってきました。オルコはアンデス地方にある21万人程の町ですが、カーニバルは先住民の文化やスペイン植民地時代の記憶に基づく伝統的な祭りであり、2009年世界無形文化遺産として登録されています。その時の写真と、タリハの街並み、近郷のワイン蔵めぐり、職場の写真を送ります。



日本では季節の変わり目、みなさんお身体ご自愛ください。(2017/3/26)

新入会員のご紹介 (45号発行以降入会の方) (個人会員)

矢部 正美 (さいたま市)
飯田 善二 (さいたま市)

入会のご案内

当会では、随時会員を募集しております。是非お知り合いをご紹介ください。申込書などは事務局に用意してあります。お気軽にお問い合わせください。

【年会費】

- ①個人会員：一口 3,000円
- ②団体会員：一口 10,000円
- ③法人会員：一口 20,000円
- ④寄付：大歓迎

★小さなハートプロジェクト

埼玉県出身で、2015年度にモザンビークに派遣された藤田絵美子隊員から要請のあった「こどもたちに夢と希望を！ナカラ市初のこども図書館設立」に、当会から隊員支援のために寄付をしたことは、前号でも紹介しましたが、その後、(一社)協力隊を育てる会事業部より報告が届きました。



こどもたちの将来の就職支援や勉強のできる環境の確保などを目標として発足したこのプロジェクトですが、2017年9月、建物の修繕をするところから始まり、現在では、100冊以上の蔵書があるそうです。年齢に応じて読み聞かせをしたり、こども向けの英語の映画を上映したりしているそうです。



支援して下さった皆様に、心から感謝をいたしました。

*

●小さなハートプロジェクトとは、隊員が本来業務の範囲を超えて現地の人たちを支援する必要に迫られたときのために、(一社)協力隊を育てる会が設けた、広範囲から寄付金を集める制度。JICA現地事務所長の推薦や、現地の人たちに確実に寄付金が届くことなどの条件をクリアした場合のみ対象となります。

★家族連絡会

平成29年度 埼玉県家族連絡会 活動報告会

平成30年2月17日(土) J A 共済埼玉ビル

主催：独立行政法人国際協力機構 (JICA)
東京国際センター

共催：青年海外協力隊埼玉県OB会
埼玉国際青年を育てる会



2月の寒中穏やかな快晴の日に、ボランティア家族は45家族67名、主催者と共催者スタッフは18名でした。

プログラムは、主催者、来賓、共催者の紹介そしてJICA ボランティア事業概要、支援体制、帰国後について説明があり、質疑応答へと続きました。

JICA 埼玉デスク廣瀬勝弘国際協力推進員の司会進行のもと埼玉国際青年を育てる会会長 星野和央、青年海外協力隊埼玉県OB会会長 榎本敬、埼玉県県民生活部国際課課長 島田邦弘の三氏よりお話がありました。



休憩ののち9人の帰国ボランティアの自己紹介があり、アジア・大洋州、中南米、アフリカの3つのグループに分かれてパワーポイントを使い活動報告を行いました。


質疑応答を含めJICA ボランティア事業概要、支援体制、帰国後のことについては、JICA 東京市民参加協力第一課杉村悟郎課長が行いました。

発表されたボランティアは職種、キャリア、派遣地域それぞれ別々ですが、ご家族を前にお話しでき、貴重な時間を持てたのではないのでしょうか。

ご家族からの声を抜粋します。

- 同じ任地の方からたくさんお話を伺えました。ありがとうございました。
- 現地の情報に触れられてよかったです。
- 視察の旅情報がよかったです。またセネガルのボランティア経験者と直接話ができてよかったです。
- 懇談会で帰国ボランティアの方やご家族の方と交流ができてよかったです。
- 不安に思っていたことがあったので、参加して安心しました。
- 受付で個人ごとの封筒(資料)を渡していただき今日のために準備してくださっていることうれしく思いました。とても有意義な会でした。

閉会后、今回参加された帰国報告者に国際理解の出前授業の担当者から、出前講座への協力をお願いしました。(大野信一)



会員出版紹介

農業普及員ひろしの「トルコ日記」
56才の誕生日を目前にチャレンジ
2年間の奮闘記

著者 里見洋司
発行者 山本正史
印刷 恵友印刷株式会社
発行所 まつやま書房
ISBN 978-4-89623-106-9 C0095

埼玉国際青年を育てる会「ホームページ」活用をお願い



2016年4月1日付で埼玉国際青年を育てる会「ホームページ」を移設して、2年が経過しました。日ごろの会員の皆様の積極的なご活用に感謝申し上げます。

ホームページには、「JICA 東京国際センター」、「JICA 埼玉デスク」、「協力隊OB会」等の事業開催通知を掲載しているほか、当会の「社行会」、「定期総会」、「理事会」、「拡大常任理事会」等についても掲載しています。今後もホームページを積極的にご活用いただければ幸いです。

また、会員の皆様からの「ホームページ」への掲載情報の提供をお待ちしています。

なお、ホームページのURLは以下の通りです。

・埼玉国際青年を育てる会 新ホームページ
<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~saitamakokusaiseinen/>

・埼玉国際青年を育てる会 旧ホームページ
<http://www.sodaterukai-saitama-jica.com/>
にアクセス致しますと下記内容が表記され、新ホームページに接続されます。

新しいサイトへ5秒後にジャンプします。
ジャンプしない場合はこちらをクリックしてください。



■事務局便り

海外への雄飛

その本の「はじめに」は……「周囲の国々から孤立し、狭い国土に生まれ育ったがゆえに広い世界に憧れ、新天地を求めて飛び出して行った者も、その数は知れない。今改めて日本人の海外渡航史をひもとくと、旺盛活発に海外へ雄飛して行った先人の足跡が鮮やかによみがえってくる」。

第1話は南アフリカのケープタウン。明治半ば過ぎ、この港町にはるばる日本から一組の若い夫婦が渡る。彼らこそ、この地に根を下ろした最初の日本人である。

第9話はラオス。文献によると、明治以前にこの地へ入った日本人の記録はなく、明治30(1897)年に日本人二人が探検旅行をしたというのが最も古いものである。第22話までである著書名は「そこに日本人がいた！」一海を渡ったご先祖様たち—熊田忠雄著(新潮文庫)。

金子みすゞの詩「空と海」の眩しさ。

「春の空は光る、絹のよにひかる、なんでなんでひかる。なかのお星が透くからよ。春の海は光る、貝のよにひかる、なんでなんでひかる。なかに真珠があるからよ。」

さて、昭和・平成と世界のすみずみまで足を踏み入れ、地元の人たちと協働しながら地域問題の解決に奮闘する日本の若者たち。青年海外協力隊員と呼ばれる若者たちの熱い思いと各地に残した功績は、そこに日本人がいたということで語り継がれる光景が目につく。

今、青年海外協力隊員の皆様はどのような大空と大海原を見ているのでしょうか。

(事務局長 矢部保雄)



■編集後記

今回も多くの方たちの協力を得て、無事に46号を発行することが出来ました。当会の主な活動の一つである出前講座では、小・中学校や公民館などでの要請が増え、これに応える形で、今年度も既に9名の隊員たちが体験を語りました。インターネットで何でも調べることができる時代、それでもやはり、実際に海外で活動してきた人たちの生の声を聞くと、身に迫るものがあり一層興味関心をかき立てます。

引き続き皆様からの情報をお待ちしております。

・発行：埼玉国際青年を育てる会
・編集：広報委員会
・事務局：埼玉県鴻巣市下谷1576
矢部保雄
TEL・FAX 048-543-1355
E-mail : yasuo.y08@gmail.com
・<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~saitamakokusaiseinen/>